

靴のデザインにみる戦後史 ⑥

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎

20世紀も終りに近づき、90年代に入るとバブルの崩壊や、環境の保全、高齢化社会などさまざまな問題が現れてきた。

1990年（平成2年）回顧的なデザインをとり入れる傾向があり、スコットランドの民族靴で紐付きのギリ^{ひも}ーが紳士靴や婦人靴に現れたり、片側に2個のバックルを付けた“ダブル・モンク”の紳士靴がつくられた。

1991年（平成3年）紺のブレザー・コートが若者の間で流行した。また、ビジネスマン用には仕事と休日も兼用に履ける、甲が革で底に合成ゴムのスポンジが付いたヴァーサタイル（変化出来る）というスタイルの紳士靴が普及した。

1992年（平成4年）ディスコが盛んになり、ステージで履くエレガントな婦人靴もつくられた。

1993年（平成5年）6月に皇太子殿下と雅子様の結婚の儀が行われた。

1994年（平成6年）この頃より女子高校生の間で、白い綿の長めのソックスを制服のスカートに合わせて着用してずり下げ、足首のところをたるませて履くことが流行し、1998年頃には全国的にひろまった。

1995年（平成7年）阪神淡路大震災が発生、はきもの関係の生産も大きな被害を受けた。

1990年にイギリス・ロンドンのファッションショーで、プロのモデルがプラット・フォームを履いて転んだこともある厚底のブーツが日本にも伝わり、若い女性の間で熱狂的な流行となった。底の厚さ10センチ以上で、奇抜な服装と共に揃って履き出し、夏には厚底のサンダルも登場した。これは健康的

にも機能的にも悪く、転倒して怪我などの事故も多発したが1999年頃まで続き、日本の風俗として海外にも知れ渡った。

1996年（平成8年）スニーカーがブームになっている中で、有名スポーツ選手が愛用していることなどから人気のあるブランドが若者の間で好まれた。当初は品不足もあって、履いている靴まで奪われるという事件が連続して発生し、偽物も出回るなど社会問題となった。

この夏にはパリやミラノで日本の下駄や草履のような鼻緒式のトング・サンダルが脚光を浴び、日本でも流行した。

1997年（平成9年）紳士、婦人の爪先型に四角いスクエアー・トゥが復活した。特に紳士靴の爪先はより長く見えるロング・ノーズの傾向が現れた。

1998年（平成10年）オランダや北欧で履かれているサボのような革の甲に、合成樹脂底などを付けたクロッグが、カジュアルな気分で履かれた。

1999年（平成11年）90年代に各種の靴・はきものが登場した。海外の傾向や和風テイストもとり入れられ、スニーカーの勢力も根強く、ストリート・ファッションの傾向も盛んになって、世紀末を迎えた。



1990—1999



ギリ—婦人靴



ギリ—紳士靴



ダブル・モンク



厚底ブーツ

ロング・ノーズの紳士靴



ヴァーサタイルの
紳士靴



人気のスニーカー



クロッグ



厚底サンダル



トング・サンダル

fuku.